

子育てひろばの概念とその展開Ⅱ

- 新澤拓治 早川貴美子 新澤誠治 依田幸子
 (江東区大島子ども家庭支援センター) (東京家政大学) (江東区東陽子ども家庭支援センター)

はじめに

江東区子ども家庭支援センターみずべでは具体的に5つのひろばを柱に活動を進めている。5つのひろばは私たちのミッションの具体化であり、メッセージである。ここではより具体的に子育てひろばのあり方を考えていきたい。(別紙 参考資料1)

1 5つのひろば

(1) 遊び・ふれあいのひろば

みんなで子どもを育てる場となれるよう、血縁、地縁に変わる新しい子育てネットワークをつくる、出会い、ふれあいの場である。そして、だれもがホッとでき、本音を言える場としていく。

- 子ども同士、親同士など様々な出会いの場。
- 若い親と先輩の親、小・中・高校生など世代間の交流の場。
- 他者とふれあう中で自分に出会う、他の子ども、子育てとの出会いも起きる。

(2) 学びあいのひろば

一方的な(指示的な)援助ではなかなか解決に向かいにくい。相互に学びあう姿勢や学ぼうとする気持ちの表れに着目しながら広い意味での学びとして考えていきたい。親同士が学びあうことが必要で、講義を聞くだけでなく、自分たちの生活、子育てのあり方を見直し、気づき、自覚して、決意をする場でもある。

- 先輩の親の経験、知恵を学ぶ。
- 他の人の意見を聞きながら自分を振り返る。

(3) 育てあいのひろば

みんなで育てあう 成長を喜び合う、不安をとり払い、未来への道をすすむ。

- みんなで子どもの成長を見守り、育てあう。
- みんなで考えみんなで解決する。

(4) 分かちあいのひろば

情報を分かち合うこと、それぞれが持っている力を分かちあうことが必要である。

- 子育ての喜怒哀楽や不安も分かち合う。
- リサイクルなど物々交換的わかちあい。

(5) 支えあいのひろば

基本的な充足(受けとめ)を基盤にしながら、やがては自分で考え、自分で解決しなければならない、そのために必要なことを援助・提供していく。

- 情報、具体的な技術、専門的対応への繋ぎ。
- スーパービジョン・コンサルテーション等支える側の支えも必要。

2 みんなで育てる子育てひろば

ひろばの特徴は対象を親子に限定せず、地域の様々な人が関わってはじめて、ひろばの意味が出てくるのではないだろうか。“みずべ”では5つのひろばを中心にプログラムの展開をしてきたが、その過程でそれを成立させてきた、いくつかの要因がありそこをまとめてみたい。

(1) ボランティアの参加

ボランティアは単なるお手伝いではなく、企画運営の担い手として“ひろば”に参加している。また地域に帰って、親子に声かけをしたり、ひろばの活動を街へと広げる役割を担っている。

(2) 利用者から参加者、企画、運営者へ

まず訪れる親子を肯定的に受け止めることが第一で、すべてはそこを基盤にしたスタートとなる。そのことで自分たちの居場所となり、役割をもったり、自分を出せるようになったりしてきた。

(3) 地域の人の参加

開設当初より地域の民生・児童委員の協力があり、駐輪場の確保などがスムーズにいった。“みずべ”という新たな場をきっかけに以前からかわりを持ちたいと思っていた地域の人たちとのつながりが生まれた。

(4) 「行政との協働」と「みずべ運営協議会」

とかく行政とは分かり合えない、理解がないといった関係になりやすいが、開設前の計画時から担当者の熱意もあり、行政との協働があった。それはやはり長い保育園での活動が信頼を得ていたということにほかならない。また関係機関との連携をふまえ、運営協議会を設置し地域の子育て支援に関する意見、情報の交換が始まった。

(5) みずべ会議の構成

スタッフ・ボランティア・利用者による運営会議も設置した。関わりやすいシステムをつくることを目的としたこの会議の中から、親たちやボランティアの自主的な活動が数々生まれてきた。

3 学びあいを中心に

ここからはひろばの概念として大切な学びあいを中心にして論じてみたい。“みずべ”では保育園での経験をもとに、一方的に情報を流すのではなく相互性、互助性そして体験的な内容への転換を意識して、プログラムの組み立てを考えてきた。

以下特徴的な活動をいくつか紹介する。

(1) 子育て塾

「生活リズム」「けんかについて」「テレビ、ビデオとの付き合い方」などのテーマをもち、同グループで継続的な話合いをする。まずは自分たちで生活を振り返り、話し合いの中で課題を見つけ出し、取り組んで見るといった活動である。そこにスタッフとアドバイザーも入り適時に援助をしていく。

(2) 年齢別グループ講座

それぞれの年齢ごとに必要な情報の交換をしたり、こちらから提供をしたりする。また先輩をゲストに迎え、同じように悩んできた姿や乗り越えてきた姿を伝えてもらう。自分の子だけでなく、他の子とのかかわりも大切にしている。

(3) めだかクラブ（講習会）

ボランティアに活躍してもらい、特技を生かしてもらっている。「リラクセーション」「茶道」「絵本作り」「ハンドマッサージ」など。お互いに共感しあいながらホッとした時間を作り出している。

(4) スポットタイム（お話会・わらべ歌等）

短い時間だが子どもたちにとっても楽しい時間となり、育児文化伝承の場となっている。ここでもスタッフのみならず、ボランティアや先輩の母親が活躍している。

(5) 父親講座

話を聞くというよりも、運動遊びや木工の講座など具体的なかかわりから入る。徐々に懇談会形式で話し合いにも取り組んでいる。

4 相互保育

講座のときは保育を行うが、すべてスタッフ・ボランティアが対応をしていくということではなく親たちも保育に参加するシステムにも取り組んでいる。

プログラムを様々に展開していくときに、保育の体制を際限なく作っていくのは無理というところから考案されたシステムだが、今は短めの講習会で行っている。そこでは前半組と後半組にわかれて活動をしているが（図1）、保育の人手としてということだけではなく、保育に参加することでの効果がいくつか現れてきた。まずプログラムにただ参加するということだけでなく、役割をもち、当事者としての意識が出てくるということ、そして他の子を預かるということ自体経験したことがない人が多く、子どもの

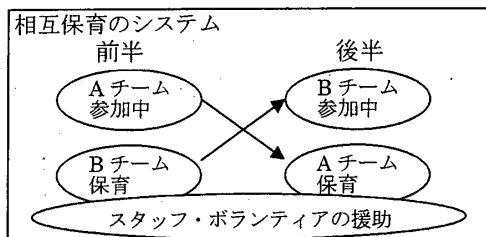


図1

行動を客観的にみることができたり、それぞれの個性の違いなどに気付いたりといった体験があった。

5 ボランティアも学びあい

講座の最中には子どもの保育が必要となるものもあり、スタッフとボランティアで対応している。

そこでは毎回、終了後にスタッフとボランティアでの話し合いがもたれ、そこが学びあいの場となることもしばしばである。「子ども同士がけんかを始めたが、どうしたらよいか?」「大泣きをしている。そこまでして母親と離す必要があるのか、疑問になる時もある」等、素直な意見を出してもらう。スタッフはすぐに回答を出すということではなく、ボランティア同士で意見を交換しあい「はじめは自分もそう思った」「私はトラブルの時は無理に解決しようとしないで、お互いの気持ちを汲み取ることにしている」「母子が離れるのはお互いにとって良い経験だと思う」「でもあまり泣きすぎて、次回から“みずべ”に来たがらないこともあった」「親の気持ちも聞いてみたら?」「またダメだったと落ち込む親もいる」等々それぞれにいろんな気持ちがあるということを知り、そうした積み重ねがボランティアの振る舞いに大きく反映していくのである。

6 親たちの主体的な活動

活動を重ねていくうちに、親たちにもただ待ち受けるだけでなく、自分たちが主体になってという意識が生まれてきている。

(1) すいすいクラブ（親たち自身による情報誌作り）

自分の経験を生かし、得意なこと、自分ができることを出し合って紙面作りをしている。ここではみな能力の分かちあい、情報の分かちあいになっている。

(2) 母の輪タイム（親たちによる教えあい活動）

「すいすいクラブ」のかかわりの中で一人ひとりが様々な能力をもっていることがわかり、それぞれの特技をみなで分かちあう活動である。その前進となったのは、喫茶“みずべ”の中でケーキを出したいという願いからできたケーキサークルである。

(3) みずべまつり

“みずべ”開設から三年後、スタッフ・ボランティアと親たちの協力において出来上がったおまつり。それぞれが、企画運営にかかわり、「子どもの笑顔展」「お父さんと遊ぼう」の開催や、リサイクル品の収集、整理をしたりしながら多くの人が参加した“みずべ”のひろば精神が象徴的に表れた活動である。

今後に向けて

子育て支援の急速な展開のもと、今後はよりいっそう、実践と理論を結びつける作業が必要になる。現場と研究者が協力しながら次代に向けて活動を続けたいと願っている。